

報告タイトル (* 日本語と英語両方ご記入ください)

「実践は真理を検証する唯一の基準」をめぐる論争と権力闘争の再検討
Reconsidering the Debate over “Practice is the Sole Criterion for Testing Truth”
and the Intra-Party Power Struggle

氏名(所属)

周家莉 (東京大学)
ZHOU Jiali (The University of Tokyo)

要旨(800字程度)

本稿は、1978年に中国で展開された真理の基準問題をめぐる討論のなかで、実践こそ真理を検証する唯一の基準であると主張した代表的な3つの文章の執筆過程に着目しつつ、「二つのすべて派」と「実践派」の対立を検討する。そのうえで、同問題をめぐって立場を表明した27の省級行政区の指導者を時系列に沿って整理し、中央レベルの権力闘争、地方人事再編と省級指導者の立場表明との関係について分析を行う。

先行研究は「実践は真理を検証する唯一の基準である」と題する文章の執筆過程や中央レベルにおける「二つのすべて派」と「実践派」の対立について重要な知見を提示している。しかし、地方レベルにおける同討論の展開についての検討は必ずしも十分ではない。とりわけ、どの省級指導者が最も早い段階で「実践は真理を検証する唯一の基準である」ことへの支持を表明したのかという点に関しては再検討の余地があると考えられる。また、当時の権力闘争および1970年代以降に進められた人事再編が省級指導者による立場表明にいかなる影響を及ぼしたのかについても十分に明らかにされていない。

本稿の分析により、以下の3点が明らかになった。第一に、「毛沢東思想を全面的かつ正確に理解する」という表現は、「二つのすべて派」と「実践派」を区別する中核的な政治言説とはなっていなかった。第二に、甘粛省党委員会第一書記の宋平は、実践が真理を検証する唯一の基準であることを支持した最初の省級指導者であった。第三に、省級指導者による真理基準問題をめぐる討論への参加は、「実践は真理を検証する唯一の基準である」発表直後に広がったわけではなかった。むしろ、1978年9月以降、鄧小平による「二つのすべて」批判が明確化されるなかで、各地の省級指導者が相次いで支持表明を行うようになったのである。党委員会第一書記の地位に復帰していた古参幹部は、省級行政区の約3分の2を占めており、「二つのすべて」路線に対して積極的な姿勢を示していなかった。他方、文化大革命期に昇進した幹部が省党委員会第一書記を務めていた地域においても、実践が真理を検証する唯一の基準であることへの支持は既存指導部によって打ち出されたというよりも、地方人事の再調整を通じて古参幹部によって表明される場合が多かった。